
月の海 眠れる森

成田チカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の海 眠れる森

【Nコード】

N9690N

【作者名】

成田チカ

【あらすじ】

「キラ」は月の首都、シーズにある「株式会社ウラシマ」という冷凍保存機器のメーカーで人体冷凍保存機器（冬眠カプセル）から目覚めたクライアントを教育する適応カウンセラーとして働いている。今日も、冬眠カプセルから目覚めたクライアントが一人…。

1章 「サク」

人類が太陽系の様々な惑星に住み始めて数百年後の世界。

ここ、月の首都、「シーズ」のビジネス街にある一見古風な21世紀風のビルが、株式会社ウラシマの本社ビルだ。

ウラシマは老舗の人体凍結保存機器、通称、冬眠カプセルの製造、販売、管理及び制御を行う会社で、今年で創業300周年を誇る。まさに老舗中の老舗だ。

創業者の名はタロウ・ウラシマ。冗談のような名だが、彼が発明した冬眠カプセルの1号機は、当時の社会では一大センセーションを巻き起こしたという話だ。

今では珍しくも何ともなくなってしまった冬眠カプセル。この原理を利用して、ウラシマでは一般や研究者向けに食物や薬品などに使用する小型冷凍保存機器も開発・製造していて、最近はこちらの方がビジネスの主流だ。

とはいえ、自分を冷凍保存したいと願い出る人々が減ったわけではない。

ウラシマ本社ビルに隣接する別棟には冷凍保存施設が常備され、人体用カプセルは全てここで使用・管理されている。

全てのカプセルはコンピュータで秒刻みにモニターされ、常に最良のコンディションを保つように工夫される。だから、数十年後に目覚めるように依頼した身体でも、凍結時とまったく遜色の無い状態で目覚めることができるというのがウラシマの「売り」だ。

凍結期間の依頼は人によって様々で、四・五年の休養期間を願い出る人もいれば、二十年後、五十年後、果ては百年後まで自分を凍結したいという人がいる。家族が迎えに来る人もいれば、時間になつて誰一人いない部屋で目覚める人もいた。

この人体用冬眠カプセルの保存施設がある本社別棟は、誰からともなしにいつしか「竜宮城」という愛称で呼ばれていた。

その、「竜宮城」内のある廊下で、一組の男女が立ち話をして
いた。

「今日のお目覚めは、16歳の男性。凍結期間50年。お迎えは受
取人の弟さん、ね。ふうん」

白衣を着た女性が手に持ったノート大の薄型モニタータブレット
の表示を読みながらそう呟くと、隣に立っていた同じく白衣を着た
男性が頷いた。

「ああ。受け取りの予定時刻は本日16時に指定されているけど、
年齢と凍結期間から、今から解凍作業に入って、教育セッションを
受けてもらった方がいいんじゃないかって思っただけど、どう？」

「そうね」

女性がそういつてタブレットから顔を上げると、彼女を見つめて
いた男性と目が合った。

「何か？」

女性が首を傾げながら尋ねると、男性がニッコリと微笑んだ。

「いや。今晚、久しぶりにまた食事でも、どう？」

女性は、すぐに鋭い目つきに変わってこう言った。

「お断りします！」

「早！ 何でだよ、キラ？」

キラと呼ばれた女性は、腰に手をあてて少し首を傾げながら、目
の前の男性を上目遣いで睨み付けた。

「あのねえ、ヤン。あなたってば、食事中にズーーーーーと今開発
中の簡易超高速凍結機器のメカニズムについて語りっぱなしなんだ
もの。お陰で私、あの晩に何を食べたのか、全く覚えてないのよ？
そんなディナーって、ある？ 誘うなら、あなたと同じような凍
結機器開発オタクを誘えば？」

ヤンと呼ばれた男性は、キラの剣幕に押されて少したじろぎなが
ら、両手を挙げて「降参」のポーズを取った。

「僕は、楽しかったのになあ……」

キラは大きな溜息を突きながら「そりゃあ、あなたはそうだったでしょうよ」と言って苦笑すると、「じゃ、解凍完了したら連絡してね」と言い残して去って行った。

長い黒髪を靡かせながら颯爽と去っていくキラの後姿を見ながら、ヤンは眼鏡を押し上げ、苦笑した。

「君も僕が解凍してあげたのにねえ、キラ……」

キラはウラシマに勤め始めて三年になる。ここでの仕事は、「適応カウンセラー」と呼ばれる、解凍後のクライアントに現代生活を送る上での注意点などを教える教育係、と言ったところだ。

年齢は現在25歳くらいだろうと推定される。「推定」でしかわからないのは、彼女の実際の生まれ年や凍結理由、本当の名前でさえも、誰も知らないからだ。通常は会社に保管されているはずの依頼者・凍結対象者データが、キラに関しては何一つ残っていないかった。K I R Aとだけ記されたデータには解凍希望日時すらも記入されておらず、全くの白紙状態だったのだ。なのに、五年前のある日、キラの入った冬眠カプセルが突如として解凍モードに入った。何故そのようなことが起こったのか、当時その場に居合わせたヤンですらもわからない。

「ヤンですらもわからない」のは、ウラシマにおいては非常事態である。ヤンは小さな頃から天才と騒がれ、地球にある科学教育の最高峰、地球科学テクノロジー大学を十四歳で卒業し、その後若千十六歳で博士号を修得した秀才中の秀才だからだ。

卒業後に幾多もの研究所からの誘いを断り、何故かウラシマに入社した彼は、瞬く間にありとあらゆる凍結機器を発明、開発した。現在二十八歳にして、この業界でヤンを知らないものはいないと言われるほどのこの世界での第一人者である。

なのに、そのヤンでさえも、キラの解凍に関しては全く予想も検討もつかなかった。それまで完全無欠で通してきたヤンにとって、この事件は彼の人生において唯一の屈辱である。だから、当人のキ

ラがこれまたどういうわけかウラシマに入社してきた当初、彼女に対してどう接したらいいのものが、ヤンには全くわからなかった。（キラはどうして、僕をいつも翻弄させるのかな）

三年経った今でも、ヤンにはその理由がわからない。

ヤンからの解凍作業完了の知らせを受け、キラは回復室Aへと足を運んだ。回復室に隣接するモニタールームの扉をノックすると、ヤンがドアを開けた。

「どんな感じ？」

「誰に訊いてるんだい？」

自信たっぷり胸を張りながらキラに逆に質問してきたヤンを見て、キラはクスリと小さく笑って「あら、ごめんなさいね」と言っていると、ヤンの横をすり抜けてモニタールームに入った。

ガラス越しに、真っ白で殺風景な回復室の真ん中にあるベットに横たわっている少年の姿が見える。彼はキラが来る三十分前に解凍室から回復室へと運ばれてきた。大小様々な機械が部屋の周りを取り囲んでいる解凍室に比べ、回復室は一見、普通の病室のように見える。違うところと言えば、窓が無いことと寝台以外の何も無い、というところだろうか。

「ふうん。結構な美少年じゃないの」

キラはニツコリと微笑みながら、手に持っていたタブレットに何かを書き込み、データを送信した。

「また、お得意の着せ替え人形ごっこかい？ 相変わらず、好きだねえ」

ヤンが皮肉やや多めに呟くと、キラはそれを鼻で笑ってあしらった。

「何とでも言つてよ。どうせ今日しか会えないんだから、その間だけでも私の好みの服装をしてもらったって、別にいいじゃない」

「はいはい」

ヤンは空返事をしながらキラの側を離れると、モニタールームで

作業をしている他の研究員達に何かを指示した。

「じゃ、後は頼んだ」

丁度ヤンが部屋を出ようとした時にモニタールームのドアがノックされ、開かれたドアからはスーツ姿の男性が姿を現した。

「おつと…。は？ 何であんたがここに？」

意外な人物の登場に呆気に囚われたヤンが目を大きく見開いてみると、スーツの男は怪訝そうに「何だよ。俺が回復室を覗きに來るのがそんなに变か？」と少し皮肉を言いながら中に入って來た。彼は彼の登場に驚き、立ちすくんだままの研究員達に軽く手を振って挨拶をすると、その視線はじつとガラス越しに回復室の中を見つめているキラに移り、さらにその視線の先にあるものへと移っていった。

「まだ目覚めないようだな、今回の眠り姫は」

キラはすぐ隣から聴こえた男の声に軽く反応すると、視線を回復室の少年から外さずに答えた。

「『お姫様』じゃないわ。『王子様』よ」

「王子様、ねえ…」

二人はそのまま、しばらく回復室の少年をガラス越しに眺めていた。

「これってさ」

キラが目の前ガラスをコンコンと軽く叩きながら呟いた。

「ん？」

「いつも思っただけど、これって、毒リンゴを食べて死んでしまった白雪姫を入れた、ガラスの棺みたいよね」

キラの言葉に、男が一瞬息を飲んだような気がした。男がキラに視線を移すと、キラは少し首を傾げながら男の顔を見上げていた。

「あなたがここに来るってことは、この子、本当に王子様なのかしら？ ロウ…」

ロウと呼ばれた男は困ったように微笑んで言った。

「まあ、そんなところだ」

ロウはウラシマの現社長だ。

体調を崩した前社長のロウの父から会社を受け継いだのが四年前。ロウはまだ二十六歳だった。それまでは大学を卒業してからずっとウラシマで未来の社長として教育を受けてきた。

通常、多忙を極めるロウが「竜宮城」に姿を現すのは年に数回の視察とVIPの凍結・解凍に関わる時のみである。だから、キラは尋ねたのだ。この少年は王子様、すなわちVIPであるのか、と。

普通はVIPのファイルにはそれなりのマーケティングがしてあるものだ。だが、この少年のファイルはどこにもそのようなマーケティングは無かった。と、言うことは、この少年は社にとつてのVIPではなく、ロウ個人の「大切なお客様」ということになる。その関係が少しは気になったが、キラはあえてそれを自分の中で押し殺した。尋ねたところで、ロウは何も答えてくれないに決まっている。今までだって、そうだった。答えてもらえない質問をしてイライラするより、今はただ、こうして隣に立っている方がよっぽど気分がいい。ロウの側にいるのは心地良い。そう、まるでずっと昔にもそうしていたことがあったかのように。

だが、それを確認することは、キラには不可能だった。何故なら、キラには凍結以前の記憶が全く無かったから。

解凍され、ここにある回復室の一つで目覚めたキラの記憶は、キラに関する記録同様、全くの白紙状態だった。名前を尋ねられても、年齢や家族のことを尋ねられても、キラは何も思い出せなかった。

脳内記憶の専門家の診察を受けてわかったことは、キラの記憶はあるにはあるが、脳の奥深くで「封印」されているらしいと言うことだけだった。

「何かきっかけがあれば、徐々に記憶は解除されていくことでしょ。焦らずに今を楽しむことです」

そう言われても、キラには何をどう楽しむのかさえもわからなか

った。何をどうしていいのかわからず、キラは途方にくれたまま、感情さえも眠りに着く前に置いてきてしまったかのように、ただ人形のように過ごしていた。

その時、キラに異変が起こった。

たまたまキラの様子を見に訪れていたロウが専門家の診察結果を聞き終わり、壁際で独り座ったまま宙を見ていたキラに向かって歩いてきた。空ろな目をしたキラの目の前に立ったロウは、困ったような顔をしてこう言った。

「キラ…。お前は、これからどうしたい？」

その一言を聞いた瞬間、キラが涙を流し始めた。

顔はそれまで通り、淡々としていたが、それでもキラの瞳からは涙がボロボロと流れ落ちていた。そんなキラを見ながら、ロウが慌てふためいた。

「お、おい！ どうすればいいんだ、これは！！」

同じ部屋の中で脳の専門家とキラについて話していたヤンが、呆れたような顔をして溜息をつく。

「副社長…。頼みますから、患者には手を出さないで下さいよ…」。

何泣かせてるんですか」

「お、俺はこれからどうしたいのかって訊いただけだ！」

「はいはい」

とりあえずキラから離れようとして、ロウがキラに背を向けて歩き始めた途端、キラの細い腕がロウの身体に巻きつき、ロウは背中に暖かな体温を感じた。

「あ、と、えーっと、キラ…？」

困惑しながらキラに尋ねるロウに、キラが首を横に振りながら答えた。

「嫌！ 一人にしないって、約束したのに…！」

（いつしたよ、そんな約束…！）

ロウはキラにそう言ってやりたかったが、相手は女の子だ。しかも、つい最近永い眠りから覚めたばかりの…。

（誰かと、間違えているのか…？）

ロウは溜息を付きながら焦る気持ちを少し落ち着かせると、まだ自分の身体に回されたままのキラの腕に優しく触れた。

「…わかったから。とりあえず、今は腕を離してくれるかい？」

ロウの言葉と共に、キラの腕に込められた力がスルスルと抜けていき、キラはそのままペタンと床に座り込んだ。

「何か、思い出したかい？ キラ」

その声に目をハツと見開きながらロウを見上げると、キラはしばらくその顔をじつと見つめていたが、やがて静かに首を横に振り、聞き取れないほど小さな声で呟いた。

「違う…。あなたじゃない」

だが、誰とロウが違うのかは、肝心のキラにもわからなかった。

その後、ロウがキラの一時身元引受人になり、自宅に連れ帰った。彼の実家には余っている部屋が何部屋があったし、キラのような特異なケースは自社の管理下に置いておく方が安全だ。それに、キラを一人で街に放り出すのは危険極まりない。それはキラに記憶が無いからだけではない。キラは、通り過ぎる者全てが振り返るような美女だ。そんな彼女が一人で街をうろついたら、たちどころに男共の餌食になるに決まっている。

加えて、ロウの家では代々、キラは家宝のような扱いを受けていたのだ。通常、冬眠カプセルは多くのカプセルが一つの制御ルーム内に安置されるが、キラのカプセルだけは何故か昔から、それ一つだけが安置された小さな制御ルームの中にあり、その部屋に入るためには特別なカードキーが必要だった。

ロウはまだ子供の頃に、祖父にキラのカプセルを見に連れてこられたことがある。祖父はキラのことを「眠り姫」と呼んでいた。確かに、カプセルの中で眠るキラは眠れる森の美女と言ったイメージだったが、小さなロウは、その数日前に学校の人形劇で見た「白雪姫」はこんな感じかなと思っていた。魔女が与えた毒リンゴを食べたてしまい、ガラスの棺の中で王子様のキスを待つ白雪姫。その肌は

雪のように白く、髪は黒檀のように黒い。

キラの隣に立ち、キラと話をしていると、ロウはあのカプセルの中で眠っていたキラとこのキラが同一人物だと言うことが本当に不思議に感じられる。

同一人物だと言うことはよくわかつている。ただ、眠っていたときと違い、今のキラは表情を持ち、会話をし、生き生きとした瞳を持つ女性だと言うことが少し違う。ヤンなどは「キラは喋らなければ極上の美人」とまで言うが、それもあながち嘘ではない。だが、ロウにはダダを言っただけ困らせたり、嫌味を言っただけたり、鋭い皮肉を言い放つキラも、またキラである。

「ロウ。あなた、この王子様の凍結理由はご存知？」

キラが少し上目遣いでロウを見ながら尋ねた。

「いや。詳しいことは。俺もそのデータに載ってる程度のことしか知らないな」

「ふうーん」

いつものことだが、キラはロウに多くのことを訊いてこない。うるさく根掘り葉掘り尋ねてくる女も煩わしいだけだが、何も尋ねてくれないのは少し寂しい時もある。

「…質問は、それだけか？」

ロウの言葉に、キラの頭が跳ねた。

「あら、珍しい。もっとお尋ねしてもよろしいのかしら？」

不自然な敬語を使いながら生き生きとした瞳で尋ねてくるキラに苦笑しながら、ロウは「どうぞ？」と答えた。

「じゃ、この王子様とあなたの関係は？」

キラの質問から、VIPだという言い訳はもはや通用しないことを瞬時に悟る。

「親戚だ。爺さんの従兄の筋だから、結構遠い親戚だな。それに加えて、彼はカグヤ・コーポレーション現社長のお兄さんにあたる」
瞬時に、ロウはキラの瞳が好奇心で満たされているのを見て取っ

た。

「カグヤって、星間引越業者の？」

「そう、あの『星から星への御荷物のカグヤが安心』のカグヤだ」

ロウのコマーシャルの声真似にプツと吹き出しながら笑った。

「へえ」。あそこの社長さん、ロウの親戚筋だったのね」

「今はそんなに『親戚付き合ひ』は無いけどな」

ロウの言葉に、キラがロウの家で暮らしていた時の記憶を急速に巻き戻す。

「そう言えば、そうね」

「それでも、まあ、一応は親戚だからな」

「……」

キラの視線がガラスの向こうの少年の元へと帰った。その真っ直ぐで強い眼差しから、キラが今、この後の彼との「セッション」について考えているのだろうと言うことは容易に想像できる。キラのことだ。既に彼が眠りに付いてから今までの五十年に起こった主な変化については既にリサーチ済みだろう。

キラがこの仕事に付き始めた当初は「記憶の無い者にこの仕事を任せるのはどうか」と言うごもつともな反対意見が多数出たが、記憶の無い者だからこそ、今を生きるのに必要なことに気付くということもある。三年経った今では、キラはこの仕事では立派な適応教育のプロだ。世の中というものは、何がどうプラスに働くのか、まだまだ予想不可能なこともあるから面白い。

実際、キラの学習能力の高さにはあの「秀才」ヤンでさえも舌を巻いていた。目覚めて一年と経たぬ間にすっかりこの時代への適応を果たし、自立して働くに当たって必要な技能も身に付けたのは驚くばかりだった。今ではロウよりもコンピューターや流行に詳しいくらいだ。そんなキラの自立を、ロウは少し寂しいとさえ思っていた。

キラの横顔を見つめていたロウの胸ポケットから振動音が聴こえた。ロウはポケットから薄型のトランプくらいの大きさのカードの

ような物を取り出すと、左耳に付いた装置を左手で少し調節しながらカード上に映るものに向かって話し始めた。

「何だ。…ああ。…わかった。今戻る」

ロウはカードを胸ポケットに入れるとキラに言った。

「キラ。一度部屋に戻るから、終わる頃に呼んでくれ」

キラはロウに向き直ると、両腕を胸の前に組みながら言った。

「了解。相変わらず忙しいのね」

ロウは苦笑しながら「まあな」と答え、右手を軽く上に挙げて部屋にいた研究員達に合図をし、モニタールームを後にした。

キラはロウの後ろで閉じられた扉を見ながら溜息を付き、その溜息の意味がわからずに戸惑い、一人苦笑した。

少年は、ゆっくりと目を覚ました。

まるで春の野原で日向ぼっこをしていたかのように、まどろむように、ゆっくりと。

少年はしばらくの間、天井をじっと見つめていたが、やがて視線を少しづつ右や左へと泳がせ始めた。

「お目覚めですか？ 御気分はいかがですか？」

モニタールームから研究員の一人がマイクを通して声を掛けると、少年は声の主を探し始めた。

「誰…？ ここは…？」

「ここはウラシマの回復室です。あなたは50年の凍結期間を経て、本日目覚められたのですよ？ おぼえていらっしゃいますか？」

少年は両目を閉じると、「ああ、そうか…」と呟いた。

「父に連れて来られて…。そう。僕はカプセルに入った。うん…。じゃあ、今は…、西暦2XXX年？」

「その通りです。御自分のお名前は覚えていらっしゃいますか？」

少年は白い天井を見つめながら答えた。

「…サク。サク・カグヤ」

「ありがとうございます」

モニター室の研究員達は様々な計器に出されている数字をチェックし続けている。

「心拍、呼吸、血圧…。よし、いいだろう。ドアのロックを解除します」

「じゃ、キラさん、行きますよ？」

研究員の一人に促され、キラと研究員は回復室へのドアを開けた。「こんにちは。初めまして、サク君」

マイクを通さずに聴こえる声に反応して、サクが頭をベットから上げた。サクの顔に、少し緊張の色が見える。

「ああ、楽にしていして下さい。私は研究員のアニーシャ。こちらは適応教育担当のキラです。最終確認のために少し、お身体をチェックさせてくださいね？」

アニーシャと言う名の研究員がサクが横たわっているベットのボタンを操作すると、ベットがゆっくりと起き上がり、サクの上体を起こした。アニーシャが少年の目や口、耳などの点検を行なっている間、キラは数分前に回復室に届いたサク用の服を持ったまま、壁にもたれながらサクを観察していた。従順に最終チェックを受けるサクはキラの視線に気付き、少し頬を赤らめながら視線を反らした。「よし、と。チェック、OKです」

タブレットに記入をしながらアニーシャがモニター室に向かってそう言うと、スピーカーから「了解」と短い返事が聞こえた。

「それでは、モニターを外して、少し身体をマッサージしますね。」

アニーシャはタブレットをベットの端に置くと、サクの身体に付けられているモニター用のパットを手早く外し始めた。外したモニターを束ねて片付けると、アニーシャはサクの身体を軽くマッサージして筋肉をほぐすと共に、少年に身体を少しづつ動かしてみように指示した。

「明日からは、御自分で今のような運動を毎朝、起きた時にやるようにして下さい。激しい運動はまだ控えてくださいね。あなたはまだ目覚めたばかりですから、身体が付いていかないと思います」

アニーシャは一通りの軽いマツサージを終えると、サクとキラに軽い会釈をしてモニタールームへと戻っていった。

キラは壁から背中を離すと、ゆっくりとサクに笑顔で近付いた。

「初めまして、サク君。私はキラと申します。身体の調子はいかが？」

それまで自分の指をゆっくりと動かしながらその様子をじっと見つめていたサクが、ゆっくりと顔を上げた。サクはキラと目が合うと、戸惑いながら微笑んだ。

「…何だか、不思議な感じです。僕がつい先程まで、50年も凍ったまま眠り続けていたというのが…。僕には、少し寝過ぎたくらいの感覚なのに。まだ、全然実感がわかないんです」

キラはクスツと小さく笑って言った。

「他の方々も、皆さんよくそう仰いますよ」

キラは手に持っていた服をサクの傍らに置いた。

「こちらの服に着替えていただき、そのあと別室に移ります。そちらで、あなたのお迎えが来るまでの間、あなたが眠っていた間にこの世界で起こった主な出来事や変化を少しお話いたします」

「あ、あの…」

サクが躊躇いがちにキラに声を掛けた。

「何でしょう？」

「それ…、どのくらいの時間が掛かります？」

「1時間ちよつとくらいだと思いますけど…。長いですか？」

サクは長い睫毛を伏せながら、何かを少しの間考え、キラに言った。

「それ、スキップすること、できませんか？」

「スキップ？」

「ええ。僕には必要の無いセッションだと思うんですけど」

「え？」

キラの戸惑いぶりを見たサクは慌てて首を横に振った。

「ああ、ごめんなさい。言い方が悪かったかな。僕は、出来れば僕

が眠っていた間に起こったことを知るよりも、今のこの世界を見て、感じることに時間を費やしたいんです。それが、僕が凍結を望んだ理由だから―」

「今の、この世界を…?」

意外な申し出にまだ戸惑っているキラに、サクは真っ直ぐな瞳で頷いた。それを見て、キラの顔から笑みがこぼれた。

「わかりました。本当のところ、その方が私は得意かもしれません。ちよつと失礼―」

キラは胸のポケットから薄型のカードを取り出して操作した。

「あ、ロウ。キラです。…はい、目覚めました。それで、セッションですが、クライアントの御希望で、これから2、3時間ほど外に出て来ます。…え?」

キラが目丸くした。少年の目からも、キラが慌て始めたのが見えた。

「はあ? あ、いえ、こちらは一向に構いませんが…。そちらは大丈夫なんですか? …はい。…はい。…了解しました。それでは、15分後に。はい。ありがとうございます」

耳の装置を切ると、キラはカードを胸のポケットに入れた。顔はまだ「信じられない」という表情をしている。

「…何かあったんですか? キラさん?」

サクが不安気にキラに尋ねると、キラはハッと我に帰って首を横に振った。

「いえ、えーっと、外に行くのに、王子様をお守りするための騎士が参上するそうです」

「は?」

「ああ、えーっと、弊社の社長が是非、御案内させていただきたいと…」

少年はキラの言葉に首を傾げていたが、やがて思いついたように言った。

「そう言えば、ウラシマの今の社長さんって、誰? 僕が凍結され

たときはサイゾウさんだったけど」

サイゾウ・ウラシマはロウの祖父だ。

「現社長はロウ・ウラシマ。サイゾウ・ウラシマの孫にあたります」

「サイゾウさんは？」

「数年前に亡くなられたと思いますが…。そのあたりのことは、ロウにお尋ね下さい」

「…うん」

サクは短く返事をする、フウ、と溜息を付いた。

「やっぱり、50年って…。思ってたよりも長いんだね」

「……」

サクのこの言葉に、キラはどう返していいのかわからなかった。自分が眠っていたは、ロウの話からも十年や二十年のことではないと言うことはわかつている。ひよっとしたら、百年、二百年の話かもしれない。しかし、今のキラにとって、眠っていた年月は全く関係のないことだ。何故なら、キラにはスタート地点がどこにも無い。凍結以前の記憶を持たないキラにとって、眠っていた年月を短いとか長いとか感じるための始点は、どこにも存在しなかった。

「あ、僕のことばかり話して…。ごめんなさい」

サクが黙りこくってしまったキラに気を遣って話しかけると、キラは我に返り、慌てて首を横に振った。

「いいえ。私のほうこそ、ごめんなさい。ちよっと、考え事をしてしまっ。それで、サク君は行きたい所や見たい所の御希望はありますか？」

キラの言葉に、サクはうーんと唸りながら上を向き、天井を見つめた。

「まずは…。そうだな、展望台みたいなところ。今のこの街の全景が見られる場所があれば、そこで。それから、この街で今一番流行っている所。それから…」

サクは少し口をつぐんで黙ってしまったが、意を決したように言った。

「シーズ大学付属総合病院へ」

「…病院？」

「うん。その庭にね、ちょっと見てみたいものがあるんだ」

キラは最後の意外な選択に戸惑ったが、あれこれ詮索するよりも、まず行動を起こすほうを選んだ。

「了解」

キラは少年に着替えてこの部屋で待つように告げると、自分も外出の準備をするために一度部屋を後にした。

着替えたキラが迎えに行くと、サクはキラが与えた服に着替え終わってキラを待っていた。

「わあ。やっぱり、思った通り！ よく似合うわ」

「そ、そうですか…？ こんな服が今、流行っているんですか…？」

「ええ。よくお似合いです。選んだ甲斐があります」

「はあ…」

着慣れない服に少し戸惑いながら歩くサクを連れてキラが本社ビルのロビーに到着すると、そこには既にロウが待っていた。

「お待たせしてしまっただかしら？」

「いや、俺も今さっき着いたところだ。そちらがサクさん、で宜しいでしょうか？」

見慣れない丁寧な態度のロウにむずがゆくなりながら、キラは男性二人の遣り取りを微笑みながら見守っていた。

「はい。あなたがウラシマの現社長さん、ですね？」

「ええ。初めまして。ロウ・ウラシマと申します」

「初めまして。サク・カグヤです。今日はよろしくお願いします」

「いえ、こちらこそ」

2人は笑顔で握手を交わす。

「では、参りましょうか」

キラが二人を促すと、ロウが頷いた。

「そうだな。外に車を待たせてある」

ロウはそう言うと、悠々と先頭を切って歩き出した。

「えっ。よろしいんですか？」

キラが恐縮しながら尋ねると、ロウが笑った。

「お前…。俺が一緒なのに、タクシーを使う気でいたのか？」

「はぁ、すみません」

ロウはフツと軽く微笑んでキラの頭をコツンと小さな拳骨でノックすると、「行くぞ」と言って本社ビルの外へ出た。

キラはロウの拳骨が当たった部分の小さな痛みが、何故か嬉しく感じられた。

サクのリクエストを元にロウが連れて行ってくれたのは、数年前に完成したばかりの新しいシーズ・センターと呼ばれる高層ビルの中にある展望台だった。その階層の壁全てが窓で作られ、壁際5メートルほど手前から床と天井も全て透明の物質で出来ているため、そこに立つとまるで空中に浮いているかのような錯覚に囚われる。

「これは、すごいですね…。僕が眠る前には、無かったな、ここ…」
サクが興奮した様子で辺りを見回している。

展望台から望むシーズの街は、中心部の高層ビル群から遠くに広がる郊外の住宅街まで、彩が豊かだ。上には街を囲むドームがあり、人々が宇宙服無しでもシーズの中で暮らしていけるように設計されている。ドーム越しには近隣の町のドームが遠くに見え、空を仰ぎ見れば、そこには青く輝く地球が見える。

初めて体験する不思議な光景に、キラはしばらく我を忘れてその空間を楽しんでいた。

「お気に召されましたか？」

後ろでロウの声がして、キラは振り返って微笑んだ。

「ええ。何だか、不思議な感覚ね。月と、地球の間にいる…。地球に引き寄せられるみたいだ、そんな感覚がするの」

そう言いながらまた地球を見上げるキラの横顔にロウはしばらく魅入っていた。

「日本の古典にある、竹取物語のかぐや姫のようですよ、キラさんでも、かぐや姫がそうやって仰ぎ見たのは月ですけど」

サクがそう言いながら近付いてきた。

「かぐや姫？」

首を傾げながら尋ねるキラに微笑みながらサクが言った。

「あれ？ 御存じないんですか？ かなり端折って説明すると、地球で育った美しい姫君は実は月の住人で、ある日月から迎えが来て帰って行ってしまうんです」

サクはキラの隣に立つと、キラと一緒に地球を仰ぎ見た。

「月に帰る日が近付くにつれ、かぐや姫は月を仰ぎ見ながら、涙を流したそうですよ」

「それは、月に帰りたいかったから…？ それとも、地球を離れるのが辛かったから…？」

「さあ、どうでしょう」

三人はしばらくの間、青く輝く地球をじっと眺めていた。

ロウにシーズの中心街を案内された後、三人はサクの希望通り、シーズ大学付属総合病院へとやって来たが、正面に到着した瞬間にサクの顔色が変わった。

「あ…。建物が…」

「？」

キラはサクの困惑の理由がわからずに首を傾げていたが、ロウが落ち着いた様子で言った。

「この病院は、建物の老朽化が進んだことを理由に、十年前に同じ敷地内で改築されたんだ」

「十年前…」

三人はとりあえず車を降り、サクに導かれるままに中庭を抜けて建物の裏手に向かった。

「やっぱり、無い…」

裏手には美しい庭が広がっていたが、サクの目的はそれではなか

った様だった。

「そうか。あの病院、少し古かったもんな。改築されるなんて、考えてもみなかったよ。馬鹿だな、僕……」

サクは遠い目をしながら呟くと、ここを去ろうとして振り返り、一点を見つめたまま動かなくなった。

「サク君……？」

サクの様子に気付いたキラがサクの視線の先を辿ると、そこにはこちらに向かって歩いてくる一人の初老の男性がいた。

「お父、さん……？ いや、そんなはずはないか。じゃあ、あれは、誰……？」

「あなたを迎えにいらした、弟さんですよ」

ロウの言葉に、サクは納得したように頷いた。

「ああ、やっぱり……。え、でも、どうしてここに？」

初老の男性はサクに近付くと、やんわりと微笑んだ。

「兄さん。サク兄さんですね？ ああ、あなたはあの頃と少しも変わらないまだ……」

「ミツル……。お前なのか？」

「はい。とは言っても、私はもう、六十を過ぎてしまいましたけどね」

「いや。また会えて、嬉しいよ」

兄弟はしっかりと抱き合い、再会を喜んでいた。

「それにしても、どうして君がここに？」

サクがミツルに尋ねると、コウの代わりにロウが答えた。

「私が連絡したんですよ。あなたがここに来たいと仰った時に」

ミツルは頷きながらサクに向かって言った。

「兄さんが探しているものは、もうここにはありません。病院の改築工事が始まる時に、病院にお願ひして、うちの庭に移転させてもらったんです」

「え、じゃあ……」

驚きながら目を見開いているサクに、ミツルは笑顔で頷いた。

「ええ、あの木は無事です。よ。うちの庭で、今年も見事な花を咲かせています」

キラとロウはカグヤ兄弟と共に、今はカグヤ邸の庭の一画にいる。
「綺麗な花ですね…」

満開の桜の木の下で、キラは花を見上げながら溜息を漏らした。
「ああ、見事な木だな」

ロウも珍しく、キラに同意しながら桜を見ている。

「この桜はあの病院でも、花が咲き始めてからはなかなか人気のある木だったんですよ。でも、改築の話が出た時に、この木を一時植え替えねばならないという話を聞いて…。どうしてもこれだけは、私の手の届くところでした。しっかりと守りたかったんです」

花を見上げているミツルに、サクは微笑みながら言った。

「ありがとう、ミツル…」

ミツルはニヤツと笑い、その面影には五十年前のいたずら少年の面影が宿った。

「当たり前じゃないか。この木の苗を父さんに黙って病院にこっそり運び込んだのは、私じゃないか。言うなれば、この木は兄さんの木でもあるけど、私の木でもあるんだから」

「あはは。そう言えば、そうだったね」

サクは笑いながら、木の幹に手を当て、そして自分の額を当てた。
「この木は、ずっと生きていく。これから、ずっと。僕がすぐにいなくなっても、ずっと…」

「えっ」

サクが呟いた台詞に、キラは思わず驚きの声を上げてしまった。
「あ、申し訳ありません…」

恐縮しながら頭を下げるキラに、サクは「気にしないで」と言つて微笑むと、満足そうに桜の花を見上げた。

「僕はね、生まれたときから病弱で、この家よりもあの病院にいた時間の方が長いんだ。十五になった時に、残りの命はあと数年だろ

うつて言われた。だから、この木をミツルと一緒に植えたんだ。僕がいなくなっても、この木が僕の代わりに、そこにいるように」

「……」

キラは、何も言えずにただ黙ってサクの話を聴いていた。

「十六の時、父に延命治療や治療法を探すための出費よりも、今すぐに僕を凍結して五十年後に解凍して欲しいって言っただ。本来なら僕が見ることのできない世界を、死ぬ前に、少しの間だけでもいいからこの目で見てみたかった」

サクは空を見上げた。桜の枝の向こうにはドームが光を反射し、その向こうには遠くに地球が見える。

「今日は、嬉しかったよ。僕の夢が叶って。こうして、花を咲かせたこの木も見ることが出来たし……。あれから五十年後のこの街を見て、歩いて、楽しむことが出来た。眠らなかつたら、僕はこの景色を見ることができなかった……」

サクは視線を桜の花からキラとロウに移すと、ニッコリと微笑んだ。

「お二人とも、今日は本当にどうもありがとう」

満開の桜の下、西日を受けながら微笑むサクは、今にも空へと掻き消えてしまいそうなほど儚く、美しかった。

「とりあえず、あの子の夢は叶った、のかな……」

ウラシマ本社ビルへの帰途、車の中でキラがそう呟いた。

「ん？」

車の後部座席でキラの隣に座りながら仕事のメールを読み続けていたロウが、読みかけのメールから顔を上げてキラを見た。キラはロウの視線に気付かずに、ただ外の風景が流れるのを眺めていた。キラの側の窓には、少し不安そうな表情をしたキラの顔がうつすらと映っていた。

（私ももし、あの子の様にただ未来の姿を垣間見るために眠らされたのだとしたら……？ 私にはあと、どれだけの未来が残されて

いるの?)

考えるだけでも怖くなる。自分が凍結された理由も、目覚めた理由も、キラは何も知らない。

(私は、私は誰...?)

「...キラ、落ち着け」

ロウの力強い声が、キラを思考の螺旋階段から力強く引き戻した。

「ロウ...?」

ロウを見るキラは、まるで迷子か、お化けに怯える子供のようだった。ロウは困ったような顔をして、キラの頭に軽く手を乗せた。

「心配するなって言っても、意味無いかもしれないけどな。余計なことを心配するよりも、今は、今を見つめろ。そうすれば自然に進む道が見えるさ」

ロウの言葉にキラは一瞬キョトンとした表情をしたが、その表情は次第に緩んで溶けていった。キラはクスツと軽く笑うと言った。

「私、そんなに不安そうに見えた?」

「ああ」

ロウはそう言いながら、再び視線を読みかけのメールに移した。

キラはロウの横顔を見ながら、小さく呟いた。

「...ありがとう、ロウ」

「ああ」

車は緩やかに、ウラシマ本社ビルの正面口へと吸い込まれていった。

2章 「レイラ」

ある日の午後。

天井の高い、落ち着いた空間を持つウラシマ本社ビルのカフェテリアは、キラのお気に入りの場所の一つだ。その一角にあるテーブルで、キラはランチの後にコーヒーを楽しみながらモニタータブレット表示された文字を目で追っていた。

その時、カツカツというハイヒールの音が近付いてきたなと思った瞬間、背後から不気味な声が響いた。

「キーラーちゃああん？」

キラはタブレットから目を離すことなく、素っ気なく答えた。

「…その声はハナちゃん？ なあに？ また合コンのお誘い？」

「違うわよぉ」

ハナと呼ばれた若い女性は、両頬を膨らませながらモニターを見続けているキラの隣の椅子に勢いよく座った。

「あたし、見たんだからぁ」

「何を？」

「この間、あんた、社長と二人っきりで車から降りてきたでしょう」

「…ハナちゃん、あのね」

キラはモニターから顔を上げると、溜息を付きながら頼杖を付いてハナを見た。

「誤解があるようだから言っておくけど、あれは、クライアントを社長と二人で送ってきた帰りだったの。わかる？ お仕事よ。お・し・ご・と！」

キラはそう言い放つと、コーヒーを一口飲んだ。ハナは「ええ？」と不満な声を上げながら、さらに「つまんない」とまで言いながら、大きなカールがかかった自分の茶色い髪を指でくると弄んでいた。

「つまんないって、何でよ？」

キラが眉間に皺を寄せながら尋ねると、ハナが嬉しそうに答えた。
「だって、わが社の美男子ランキング1位の社長と、美女ランキング1位のあんたがくつついたら、絵になるじゃない。あたし、社長が他の女とくつつくのは反対だけど、あんたならまだ許せるわ」
「あら、それはいいわねえ」

二人のすぐ側で別の声がして二人が顔を上げると、そこにはスーツ姿にショートヘアのいかにも「仕事ができます」と言っただけの女性が立っていた。

「美男と美女のカップルなんて、マスコミが喜びそうだね。いいんじゃない？」

「サチ。それ、本気で言ってる……？」

サチと呼ばれた女性は、手に持っていたサンドイッチの乗ったトレイをテーブルに置くと、キラの反対側の席に座った。

「あら。広報部としては、それもありかな、なんて」

「……あんたが言うのと、冗談に聴こえないわよ」

ハナはそう言いながらチラッと時計を見ると、慌てて席から飛び上がった。

「いつけない！ 行かなくっちゃ。今日、午後にはVIPばかりたくさん来るのよ！ お化粧直しておかないと！」

「はいはい。頑張ってるね、受付嬢」

「ありがと！ カッコいい人がいたら、すぐにメールするから！」
「はいはい」

ハナはハイヒールの音をけたたましく鳴り響かせながら、カフェテリアを去っていった。

「……相変わらず騒々しいね、ハナは。キラは今日、この後にセッション入ってるの？」

サチが野菜ジュースを飲みながら尋ねた。

「ええ。今日は一件。女性がね。ただ、ちょっと問題が……」
「問題？」

サチが眉間に皺を寄せながら三白眼になっているのを見て、キラは慌てて訂正した。

「あ、うちの社の問題じゃないよ？」

「ああ、良かった…。心臓が止まるかと思ったじゃない」

サチは安堵の息を突きながらサンドイッチを頬張った。広報部勤務のサチにとって、ウラシマの機器や技術に何か問題が起ると一大事だ。

「あのね、彼女のお迎えとして登録されてる人が、迎えに来るのを拒否してるの」

キラの話を聞いていたサチは「ふーん」と相槌を打って口の中の物を飲み込むと、水を飲んで一息入れた。

「お迎えって…、男？」

「そう」

「凍結、何年？」

「15年」

「女は何歳よ？」

「28」

「お相手の男性は、今何歳？」

「…30」

「うわあ」

「…でしょ？」

二人は顔を見合わせながら溜息を突いた。キラは両手で頭を抱えた。

「私、こういうケース初めてなのよ。どうしよう…」

サチはサンドイッチを頬張りながら頷くと、水を飲んでから言った。

「そうよね～。キラってば、自分の恋愛だってまだなのにな」

「…大きなお世話」

「でさ」

サチがニヤツと笑いながら言った。

「さっきのハナじゃないけど、社長とのこと、どうなのよ？」

「ど、どうって…？」

キラはドギマギとしながら平静を装うと試みたが、目は宙を彷徨っていた。サチはクスツと笑いながら、さらに追い討ちをかける。

「付き合ってないの？」

「そんなバカな？」

キラはテーブルに突っ伏した。その様子を見ながら、サチが追い討ちをかける。

「一緒に住んでたくせに」

「あれは、行く当ての無い私を、社長の御家族の御厚意で居候させてもらってただけだし」

サチは前屈みになると、突っ伏したままのキラの頭に向かって小さく囁いた。

「でも、好きなんですよ？」

「……」

しばらく沈黙が流れた後、キラが上体を起こしてテーブルに頬杖を突いた。

「わからない」

サチは黙って聞いていた。

「わからないの。ロウに対する感情が、ロウに対してのものなのか、それとも、ロウによく似た他の誰かに対してのものなのか…。ロウと一緒にいると、何かを思い出すような、そんな感じがするんだけど…。変よね？」

困惑顔のキラに、サチはふんわりと優しく微笑むと、「いいんじゃない？」と言った。

「いって、何が？」

「ん？ そうやって悩むようになったけども、進歩でしょ？ いいじゃない。ゆっくりと向き合えば」

「向き合う、ね…」

キラは少しの間、窓の外を見ながら考えていたが、「うん」と小

さく言つて荷物をまとめ、席から立ち上がった。

「もう行くわ。ありがとう、サチ」

サチはニツコリと微笑みながらキラに小さく手を振った。

「グットラック。ま、何かあったら一緒に飲んであげるから、連絡ちょうだい？」

「オッケー」

キラはサチに軽く手を振ると、「竜宮城」へと向かった。

最近、よくキラが自分の視界に入ってくるな、とロウは思っていた。

今もそうだ。ウラシマ本社ビルのエレベーターの中からは、吹き抜けになっている1階ロビーが見えるようになっていたのだが、1階から40階まで昇るまでの僅かな時間で、1階ロビーを颯爽と歩くキラの姿を見つけてしまった。

普段は本社別棟、通称「竜宮城」の中にいることが多いキラは、本社ビルにいるとよく目立つ。今も、エレベーター内の全ての男性社員の視線がキラの上にあることは一目瞭然だ。それがロウには腹が立つ。そして、腹を立てている自分に腹が立つ。

（俺は一体、何をしてるんだか…）

少し冷静に戻って再びロビーを見下ろすと、そこにはもうキラの姿は無かった。今度はそれを残念に思う自分が少し残念だ。

キラは確かにロウの心の中において、他の女性とは違う場所にいる。しかし、それにはちゃんとした理由がある。

キラの解凍事件が起こった五年前、実はロウはそこにいた。

仕事で大きなトラブルがあり、ストレスを抱えたロウは一人きりになりたかった。だが、白昼の社内でロウが独りになれる場所など、そう多くは無い。ロウはふと、キラのカプセルが置かれた部屋を思い出した。昔、祖父に連れられた時もあの部屋や周りには誰もいなかったし、あの部屋のあるエリアに入るには、社内でもごく僅かな

人間だけが持つ特別なカードキーが必要だ。そしてロウは、そのカードキーを持つことを許されている数少ない人間の中の一人だった。ロウはキラの部屋に入り、しばらくの間、静かな室内で自分の頭を冷やしていた。

「…ちくしょう」

いくら腹を立てても、起きてしまったことを無かったことにする術はない。今は、そこからどう前に進めるかを考えなければならぬ。

「あいつら…。俺がウラシマの人間だからって、舐めやがって…」
同族経営だからといって、お坊ちゃん呼ばわりされるのをロウは誰よりも嫌っていた。

「俺は、俺の力で勝負してやる…」

その時、ロウはふと、誰かの視線を感じた。

誰もいないはずの部屋で視線を感じるなど、変な話だ。だが、ロウは確かに誰かに見られているような、そんな気がした。

辺りを見回しても、その部屋にいるのはロウだけ。いや、正確にはロウとカプセルの中で眠っているキラの二人だけだ。

（まさか、な…）

ロウはカプセルに近付き、中で横たわっているキラを見た。キラの瞼がしっかりと閉じられているのを確認して、安堵の息をつく。

（何だ。やっぱり俺の気のせいかな）

カプセルの中のキラは、幼い頃に見た時と変わらない美しい姿をしている。あの時は別に何も思わなかったが、こうしてみると眠っているのが残念なくらいの美女だ。

「お前は、いいな。俺みたいに怒ったり、憤ったり、悩んだりする必要が無い。ただ、こうして眠っているだけでいいんだから…」

彼女はこうして眠っているのだろう。起きていた時はどんな表情をして、どんな声で話したんだろう。何が好きで、何をしたいと思っていたんだろう。

ロウはふと、そんなことを考えて苦笑した。

「でも、お前の声は、いつか聞いてみたいような気がするな」

フツと軽く溜息をついてその場を去ろうとした時、ロウの頭を激しい頭痛が襲った。

「っ！！ 何だ、これ……」

視界が揺れ、動機が激しくなる。胸が圧迫され、息を吸うのも吐くのも苦しい。このままここで死んでしまいかもしれないと思った時、ロウは自分の目の前に立つ女の姿を見た。

薄明かりを放つその姿は、どう見ても先ほどまでロウが見ていたキラのものだった。だが、ロウの目の前に立つキラは、見たことも無いようなスタイルの服を着ていた。キラはロウを見ると微笑み、その額に軽く口付けると、そのまま空気に溶けるように掻き消えた。「消え、た……？」

そんな馬鹿な、と思いながら何とか這うようにしてカプセルに向かうと、キラはそこでいつものように横たわって眠っていた。

「キラ……？」

ロウがその名を呼んだ途端、何故か急にカプセルが作動し始めた。「な、何だ、これは……」

まだ激しい痛みを伴う頭を右手で押さえながら、ロウはフラフラと部屋の出口に向かった。部屋の中と外でアラームが激しく鳴り響き、誰かが遠くから走ってくるような足音が廊下中に響いた。全身が重くなり、視界が闇に閉ざされた。

目覚めた時、ロウは病院の一室に横たわっていた。そして、その場にいた彼の秘書から、キラが目覚めたことを知らされた。

（あれから、もう五年、か……）

時が経つにつれ、あの時に見た幻と冬眠カプセルの中で横たわるキラのイメージが薄れ、ロウに向かって拗ねたり笑ったりするキラのイメージが強くなった。

（時間とは、不思議なものだな）

フツと自嘲したような笑みを浮かべながら、ロウはエレベーター

から降りた。

キラが今日のクライアントの様子を見に回復室へと向かう途中、いつもクライアントの解凍後の様々な事柄をアレンジしてくれている事務員のシェリーが血相を変えてキラに向かって走ってきた。

「キラ！ 大変！」

「…その様子だと、やっぱりダメなの？ お迎えさん」

キラが尋ねると、シェリーがブンブンと首を縦に振った。

「ど、どうすればいいかしら、キラ…。何かいいアイディアは無い？」

キラは「うーん」と言いながらモニタータブレットからクライアントの情報ページを引き出した。

「御自宅に連絡は？」

「クライアントの御実家には何度も連絡したわよ。でも、先方は『そんな人は知らない』の一点張りで…」

「御本人なのには？」

ウラシマでは、凍結者の家族情報は定期的に更新され、住所の移転などにも対応できるようにされている。

「そうなのよ。この方の場合、御家族はこの15年で移転もなくて、名前なども確認されたのに、『そんな娘はおりません』って言ったきり、取り合ってくださらないの」

「で、このお迎えの方も？」

「お迎えの方は『知らない』とは言わなかったけど、『自分は迎えに行けない』って。その後に、『もう関わらないで欲しい』と言われてしまった…」

「理由は？」

キラの問に、シェリーは首を横に激しく振った。

「何度尋ねても、教えてもらえなかったわ」

「そう…」

キラは時計をチラツと見ると、胸ポケットからカードを取り出し

て操作すると、耳に付けられた装置

に手を触れて少し調節した。

「…あ、ヤン？ キラです。本日午後一の解凍クライアントの女性ですが、あとどのくらいで目覚めるか、あなたの予想が聞きたくて…はいはい。そうです。あなたが一番確かです。…はい。…はい。わかったわ。ありがとう。…それは遠慮します。じゃ」

キラがカードを再び胸のポケットにしまった後、シェリーが尋ねた。

「そ、それで…？」

「あと二時間近くありそうだから、私がこのお迎えの人に会ってくる」

「ええっ？」

「だって、詳しい事情がわからなかったら、私達もどう説明したらいいか判らないじゃない？」

「そう、ね…。では、お願いできるかしら？」

「了解。ここにある情報、全てアップデートされてるのよね？」

キラがタブレットの画面をコンコンと指で突きながら言うと、シェリーは自信たっぷりに答えた。

「勿論よ」

「じゃ、行つて来ます」

キラはそう言うと、先ほど来た道を引き返して行つた。

シェリーが念のために回復室にキラが外出したことを告げに行くと、そこには先ほどキラが電話で話していたヤンがいた。

キラの外出を聞いたヤンは、椅子の背にもたれながら不貞腐れた。

「…なんだ。言ってくれば、僕もキラと一緒に行ったのに…」
シェリーは首を傾げながら言う。

「あら、キラが断つたのはその件じゃなかったんですか？」

「いや」

ヤンは椅子から立ち上がりながら言った。

「今晚一緒に食事に行こうって誘ったら、いつものように断られた

よ」

モニタータブレットに記載されている情報によると、今日のクライアントの「お迎え」として登録されている男性は、ウラシマ本社ビルからさほど遠くない場所にあるオフィス街にある広告代理店に勤めているとのことだった。

受付に不機嫌そうに現れた彼はキラを見ると一瞬戸惑っていたが、簡単な挨拶の後、空いていた会議室に通してくれた。

「突然、お邪魔してしまつて申し訳ございません。改めまして、ウラシマで適応カウンセリングを担当しております、キラ・ツクヨミと申します」

「あ、いえ。こちらこそ、御足労いただいて申し訳ありません。キース・ウェルズと申します。ここで、主にデザインの仕事をしています」

キラはキースと名乗った男性から名刺を受け取ると、促されるままに椅子に座った。キースはポロシャツのよく似合う、爽やかな印象の男性だった。

「本日は急な訪問にもかかわらずお時間をいただきまして、ありがとうございます。今のこの状況では、お迎えの不在をどのようにクライアントに説明すればいいのか、わからないものですから」

キラがそう言うと、男性が困ったような顔をして「彼女の…御家族は？」と尋ね、それにはキラが静かに首を横に振った。

「クライアントの御家族は、クライアントとの家族関係を否定なさいました」

だが、キラのその答えは彼にとっては予想範囲内だったらしい。キースはキラに向かって頷くと、小さな溜息を突きながら言った。

「…やっぱり、あちらはまだ、怒ってらっしゃるんですね」

（「やっぱり」って…。やっぱり何かあったのね…？）

キラはどんよりと沈みそうになる気持ちを叱咤しつつ、キースに単刀直入に尋ねてみた。

「あの…。15年前に何があっただんですか…？ あ、ここでお聞かせいただくことは全てクライアントの守秘義務に基づきまして、絶対に口外いたしませんので…」

キラがそう言うと、キースは少し口をつぐんで黙ってしまった。

そのまま時間だけが流れてしまうのかと思った矢先、キースが口を開いた。

「俺は、彼女の生徒だったんです…。俺はまだ15歳で、彼女は当時28歳でした。ああ、彼女はまだ、今も28歳のままだんですね」

彼が入学した高校で、彼女は美術を教えていた。

彼女は生徒である彼と恋に落ち、彼との未来を夢見た。もちろん、周りは反対した。彼はまだ15歳で合法的に結婚できる年齢にさえ達していない、ほんの子供だった。だが、周りが反対すればするほど、本人達は意固地にこの恋を貫こうとした。そんな中、彼女が一番気にしていたのが二人の年齢差だった。それを解消する手立てとして、彼女は独り、15年の眠りに踏み切った。

「ショックでした。俺は年齢差なんて関係ないって言ってたのに、そこまで気にしていたのか、と。それでも、最初は15年なんてすぐだと…。俺がすっかりとした大人になって彼女を迎えに行けばいいんだと、そう信じてました。俺も、あの時は彼女のことを本気で愛しているんだと思ってましたから。でも…」

キースは一瞬、口をつぐみ、何かを頭の中で整理するかのように目を伏せた。その間、キラは黙って彼が再び話し始めるのを待っていた。

やがてキースはゆっくりと目を開くと、そのままどこか遠くを見つめながら言葉を紡いだ。

「彼女が眠りに入った後、しばらくして…。まるで呪縛から解けたような、何だかそんな感覚になったんです。急に、目の前が開けたような…。暗い部屋から出たような…」

キースの声は、少し震えていた。

「『気持ちが冷めた』と言われればそれまでかもしれませんが。でも、俺はきつと彼女と一緒にいた時、彼女の強い気持ちに、かなり流されてた部分があったんじゃないかと思うんです。自惚れかもしれませんが、それ程、彼女の俺に対する想いは強かったから……」

彼女が眠っていたこの15年の間に、彼は大学に入り、卒業して今の会社に就職した。そして数年前に大学で知り合った別の女性と結婚した。彼は、彼自身の人生を過ごしている。

「俺には妻も、子供もいるんです。彼女には悪いけど、俺は今、幸せなんです。そんな俺が、何も無かったように彼女を迎えに行けるわけなんてないんです。裏切ったと思われても仕方がない。けれども……」

キースは迷いながらも、必死に頭の中で言葉を探し、そして言った。

「時間は、常に動いてるんです。15歳の子供が大人になって、30になって……。この15年は、俺の人生の中で、何よりも大きな15年だったと……。そう、俺は思うんです。時間が動けば、人の気持ちも動きます。服や音楽に流行があるように……」

キラに一つだけわかったことは、彼の人生に、クライアントの居場所はもはや何処にも無いということだった。

「竜宮城」に戻るまでの道程は、キラにとってはとても長い道程に感じられた。

キースの話から、クライアントがどれだけ彼のことを愛していたのかはわかる。だが、この15年という月日は二人の間に大きな歪みを生んでしまった。クライアントにとっては眠りに付いた時点からの続きでしかないが、キースにとって、彼が言った様に15歳の少年が30歳の大人の男性に育った時間は何よりも大きいと思う。キラにとって、クライアントの想いも大事だが、キースの今の幸せも大事にしたい。

（どう説明したら、受け入れてもらえるのかしら…）

現時点での恋愛偏差値が非常に低いキラにとって、この状況は辛い。悶々と思い悩んでいるうちにウラシマ本社ビルの正面口に到着し、それとほぼ同時に、胸のポケットに入っていたカードが鳴った。「はい。キラです」

カードには泣きそうな顔のシェリーが映っている。シェリーの後ろに、ヤンの横顔がチラリと見えた。キラはモニター越しにシェリーに見られないよう、小さく溜息をついた。

「キラ。あなた、今どこにいるの？」

「今、ちょうど戻ってきたところです。…目覚めましたか？」

「ええ。ついさっき」

「…すぐにそちらに向かいます」

「で、状況は？」

心配そうなシェリーの顔を見ながら、キラは溜息を一つ突いて静かに首を横に振った。その様子を見たシェリーが絶望的な声を出す。

「え、やつぱり？」

「ええ。相手はもう結婚してて、お子さんもいらっしゃるの」

「あっちゃ」

カードの中のシェリーが頭を抱える。その後ろで「お、修羅場か？」と冗談のように言うヤンの声が聴こえ、それはキラを苛立たせた。

「とにかく、今すぐにそっちに行くから」

キラはそう言つと通話を切った。

キラが回復室に到着した時、クライアントは既に身体に付けられていたモニターを全て取り除かれ、研究員から身体の簡単なマッサージと筋肉の運動の説明を受けていた。

「遅くなって、すみません」

「本当だよ。遅刻はここでは厳禁だろ？」

回復室に隣接するモニタールームには、何故かヤンがいた。

「…何であなたがここにいるのよ」

「『何で』はないだろう？ つれないなあ…。君が来るから待ってたのに」

ヤンはそう言いながら立ち上がり、キラに近付くとキラの肩に手を回した。

「…この手は何です？ セクハラで訴えますよ？」

「デートした仲じゃない」

ヤンの言葉に、その場にいた他の研究員とシェリーがギョツとする。そんな中、キラは冷ややかに言い放った。

「あなたの研究自慢を聞きながら、夕食を一緒にしただけですけどね」

「それは立派にデートじゃないか？」

キラは大げさに溜息を突いて見せた。

「関係が進展するどころか、一気に振り出し以下になりましたけど」
「え？ えええっ？」

驚くヤンの横でシェリーが呆れながら手を叩いて二人の注意を促した。

「はい、両者ともそれまで！ キラ、これが彼女の服。あなたは早く回復室に入りなさい。ヤンはとっとと自分の部屋に戻りなさい！」

「はい」

二人が声を揃えて間の抜けた返事をする、シェリーが悲し気に眉を寄せた。

「大丈夫だつて、シェリー。私、何とかできると思う」

キラがシェリーに向かって微笑むと、シェリーは小さく頷いた。
「入りますね？」

キラが研究員の一人に声を掛けると、回復室への扉が静かに開いた。

クライアントはベットの上で、窓の無い回復室の中を不安気に見渡していた。彼女は美しい整った顔立ちをした北欧系の女性で、色

素の薄い長い金髪がウェーブを描いて彼女の肩の上に流れていて、その姿はまるで絵本に描かれた「雪の女王」のようだとキラは思った。

「初めまして、レイラさん。私はキラと申します」

名を呼ばれた女性は声のした方に視線を移し、ゆっくりと微笑んだ。

「初めまして…。キラ、さん？」

「ええ。そうです。ご気分はいかがですか？」

キラがゆったりと微笑みかけると、レイラは自分の身体に尋ねるようにすうつと深く深呼吸をした。

「不思議な、感じね。本当に今は、私が眠ってから15年も経っているの？」

「ええ。正真正銘、西暦2XXX年ですよ？」

「そう…」

レイラはそう言つて瞳を閉じると、少しまどろみながら微笑んだ。その微笑があまりにも幸せそうで、キラは胸が痛んだ。

「これから、少しお話をしたいと思います。私は本来は適応カウンセリングと言つて、眠っていらした方の現代への生活適応をお手伝いする役目なのですが、レイラさんの場合、眠っていらしたのが15年と比較的短くていらっしゃるので、あまりお時間は取らないと思います」

「そう、ね」

レイラはゆっくりと目を開けた。

「こちらに、お洋服を用意させていただきました。まずはこちらに着替えていただき、別室でお茶を用意しますね。何か食べたいものとか、御希望はありますか？」

レイラは少し考えると「いいえ、特に…」と言つて微笑んだ。

キラはレイラが服を着るのを少し手伝つと、少しまだ歩き辛いやうに言うレイラのために車椅子を用意し、カウンセリング・ルームへと移動した。

キラが使用するカウンセリング・ルームは、居間のような雰囲気
のくつろげる空間になっている。部屋には大きなソファや観葉植物
が置かれ、ここには窓もある。

キラはレイラをソファに座らせると、紅茶と茶菓子を用意した。
「どうぞ。まだあまりお腹は空いていらっしやらないかもしれませ
んけど」

「ありがとう」

レイラはティーカップを手にとると、それで両手を暖めた。

「暖かい…」

眠っている時は意識が無いから冷たさも感じないのだが、目覚め
た後に初めて暖かいものに触れた時の安心感は、キラもよく覚えて
いる。そしてそれは、目覚めた人に共通する感覚らしい。

「レイラさんは、目覚めたら何をしようってお考えでしたか？」

キラの質問に、レイラは夢を見るように少し上を見ながら答えた。
「そうね…。私は、彼と一緒にいられれば、それで…。あの子はど
んな風に成長したかしら…。あ」

レイラの視線がキラへと移った。

「彼は…。キースは、ここにもう来ているかしら？」

レイラの笑顔はあまりにも幸せそうで、キラは一瞬躊躇ったが、
正直に首を横に振った。

「え…？」

レイラの笑顔が徐々に曇っていく。

キラは胸に重い石が入ったような気がしたが、それでも自分は全
てを正直に伝えると決心したのだと思い返しながら軽く拳を握りし
め、レイラに向き直った。

「残念ながら…。キースさんは、あなたを迎えることができません」

「ま、まさか、キースの身に何かあったの？」

キラの方へ身を乗り出しながら尋ねるレイラに、キラは言った。

「キースさんは、元気に暮らしていらっしゃいます。ただ、あの方

には既に…」

「既に…？」

レイラの緑色の瞳がキラを真っ直ぐに見つめている。キラは口が
渴くような感覚を覚えながらも、その言葉を口から出した。

「家庭が、あるんです」

「え…」

レイラは呆然としたまま、しばらく動かなかった。

「キースさんは数年前に結婚されて、お子さんもいらっしやいます。
『この15年はとても大きなものだった』と…。そう、仰っていました」

「…そ。嘘。嘘よ。あの子が私を裏切るなんて！」

高ぶる感情を隠すことの無いレイラに、キラは出来るだけ落ち着
いて答えた。

「裏切ったんじゃ、ありません」

「あなたに何がわかるのよ？ キースに会わせて。あの子に直接訊
くから！」

立ち上がりそうになったレイラの両肩を押さえながら、キラは強
い口調で言った。

「いいえ。それはダメです」

キラは真っ直ぐにレイラの瞳を見つめた。レイラの瞳は小刻みに
揺れている。

「あなたにも、きつとわかると思います。15歳から30歳への1
5年の時間が、どれだけ重くて長いものなのか。そして、彼のその
時間を手放したのは…、眠りに入って自分の時間を止めた、あなた
です」

「私…？ 私が、手放し、た…？」

キラはゆつくりと頷いた。

「彼と一緒にいたかったのなら、手放すべきではなかったんです。
どんなに年齢が離れていても、側にいるべきだったんです」

「側に…」

レイラはそう言っただけ俯いた。傍から見ても、彼女が意気消沈している様子が手に取るようにわかる。

「酷な事を言ってしまったて、申し訳ありません。でも、これだけはもう一度言わせていただきます。今のあなたとキースさんを会わせることは、できません」

レイラはしばらくの間ソファの上でうな垂れたまま座っていた。彼女の周りだけ、まるで時間が止まってしまったかのように静かだった。キラは何も言えず、レイラの隣に座り、じっと彼女の反応を待った。

やがて、レイラの口が小さく動いた。

「わかり、ました…」

俯きながら言うレイラは、とても儚げだった。

「私…、バカだったわ。自分勝手に、あの子も私のために全てを捨ててくれるなんて思ってた。15歳だったあの子に、捨てられるものなんて何も無かったのにね」

「レイラさん…?」

レイラは大きく息を吸って吐き出すと、口の端だけを持ち上げて無理に笑顔を作っただけを見た。

「これは、賭けみたいなものだったんです。最初から…。私は、13歳も年下のあの子に本当に愛されているのかどうか、不安だった…。だから、周りの反対を押し切って眠りについたの。それに、周りも私達の関係に気づき始めて…。私達には、逃げる場所がどこにもなかったわ」

レイラはソファにもたれると天井を見上げた。

「逃げずに、押し切る勇氣も無かった…。だから、自業自得なの。仕方ないわね。ふふっ」

そう言っただけ笑い始めたと思ったレイラは、氣が付くと泣いていた。「待つ勇氣も、諦める勇氣も無かったわ…。それで全てを失うなんて、私は本当にバカよね。私にはもう、何も残ってないわ…。私、あの時に、全てを捨ててしまった…」

泣き続けているレイラの肩を抱きながら、キラが言った。

「そんなこと、ありません。思い出も、あなた自身も、ちゃんと残ってます。だから、ここから先に進めばいいんです」

「でも、私…。実家からは、追い出されたし、仕事も、無いし…。私、これからどうすれば…」

キラは少し考えて、そして言った。

「なら、うちに来ます？ 私、一人暮らしですけど、あなたが寝泊りするくらいのスペースはあると思います。仕事はこれから見つければいいし、当面は何かかりますよ？」

レイラはキラの言葉にキョトンとした表情をしていたが、フツと表情を崩すと涙目のまま笑った。

「あなたって、お人よしね」

「そう言われたのは初めてです」

「そうなの？」

レイラに言われて、キラは頷いて言った。

「きっと私、あなたのことが他人事のように思えないんです。私も、眠りから覚めた時は何も持っていなかったから…」

キラの言葉にレイラは両目を見開いて驚いた。

「あなたも、凍結されていたの？」

キラは微笑みながら頷いた。

「ええ。それに私の場合、目覚めた時に記憶さえも無かったんです。だから、しばらくの間、この会社の社長さんのお宅に居候させていただきました。お陰様で、今は何とか一人暮らしができてますけど」

「記憶が…？ それは、今でも…？」

レイラの問に、キラは「ええ」と言って頷くと紅茶を一口飲んだ。「今でも、凍結前の記憶はありません。でも、解凍されてから、沢山思い出ができたから。だから、私は大丈夫なんです。だから、あなたもきっと大丈夫。少なくとも、私はそう思ってます」

レイラはしばらくキラの顔を見つめていたが、ゆっくりと頷くとキラに右手を差し出した。

「じゃ、ありがたく…。しばらく、厄介になるわね？　よろしく、キラさん」

「こちらこそ」

二人は固い握手を笑顔で交わした。

ひとまず先のことが決まると、キラがソファから立ち上がりながらレイラに言った。

「さて。早速ですが、今日の夕食は何にします？　私、こうなることを想定していなかったんで、家の冷蔵庫に何も入ってないんですけど」

レイラはゆつくりと立ち上がりながら微笑んだ。

「じゃ、早速で悪いんだけど…。今夜は美味しいお酒を飲みたい気分なの」

「了解」

キラはテーブルに置いていたタブレットを手にとると、友人のハナとサチにメールを打った。

「召集！！」

今夜は、女同士の賑やかな夜にしよう。ここから、全てを始めることができるように――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9690n/>

月の海 眠れる森

2010年10月9日02時55分発行